

出張報告書

会議名：第 22 回社会科学の哲学円卓会議（Philosophy of social science roundtable）

開催地：エモリー大学、アメリカ合衆国、ジョージア州

開催日：2020 年 3 月 13 日（金）－3 月 15 日（日）

【会議の概要】

本会議は、米国・ミズーリ州・セント・ルイス周辺に勤務していた社会科学の哲学を専門とする哲学者たちが議論の場として立ち上げたもので、今回で 22 回目の開催となる。会合の規模そのものは、大学の一教室で完結するコンパクトなものであったが、一方でその内容は、米国や欧州の各地から社会科学の哲学を専門とする様々な年代の研究者が集まり、13 日の朝から 14 日の晩まで、研究発表を立て続けに行うというもので、発表のトピックも多岐にわたる充実したものであった。

とりわけ今回は、「科学的理解と表象に関するワークショップ」（The Scientific Understanding and Representation Workshop）との共催となっており（こちらは 12 日－14 日に開催）、二つの会合の間を人が行き交っていたことにより、例年以上に多様な関心を持つ研究者が参加していたのではないかと思われる。

なお、本会議はコロナウイルスが世界的に流行を拡大する中で開催されたものであり、運営のあり方や参加者の会合に対する関わり方を紹介する上で、この問題に触れないわけにはいかない。会合開催の 1 週間ほど前、3 月前半にはコロナウイルスは世界的に流行を広げつつある状況であり、日本国内でもいくつもの学会会合が中止になっていた。そのような中で本会議の開催を執行するのか、主催者側に対する問い合わせが相次いだようだ。主催者側はそれに対して執行すると応答した。主催者側が決断の理由としてあげたのは、（1）Zoom による遠隔参加の準備を整え、リスク回避の選択肢を参加者に提供できること、および（2）エモリー大学のポリシーに照らして、会合を中止する必要はない、というものであった。だが、12 日に事態は急変し（共催のワークショップの開催当日である）、感染の拡大に鑑み、大学当局から不必要な学会会合の中止が推奨された。これをうけ、主催者は、既に現地入りしている人を除いて Zoom での参加を要請した。結局、参加者は共催のワークショップを含め 40 人は超えていたと思われるが、基調講演を含め大部分の発表および質疑応答は Zoom を通じて行われ、実際に会場にいたのは 20 人未満だった。

このような事情により、Zoom を通じた参加を円滑にするための工夫がいくつも行われていた。例えば、開催の二日前、主催者は希望者と接続実験を行っている。この実験では会議で用いられるセッティングを再現し、参加者に接続の方法のデモンストレーションを行って

いたようだ。そのおかげか、参加者が時間になっても Zoom 上に現れないということはほぼ起こらなかった。また、発表の前にはマイクの音量が適切か Zoom の参加者に尋ねたり、発表後の質疑では Zoom の参加者が質問しやすいように、Zoom の参加者の質問が優先したりするなど、Zoom の参加者に対する気配りがいくつも見られた。そのおかげか、休憩時間は Zoom の参加者がフロアと関わりにくい時間に見えるが、発表に関連した議論が Zoom 上でなされたり、その議論にフロアが応答したりといった光景も見られた。もっとも、画面の共有に関するトラブルはいくつか見られ、発表者のスライドがフロアのスクリーンにうまく共有されないために進行が遅れたり、画面共有がうまく行っていないことに気が付かないまま発表が進行してしまったりといったアクシデントも見られた。だが、全体としては、オンラインの参加者が大多数を占めていたにも関わらず、発表や質疑がスムーズに進行し、オンラインの参加者からも盛んに質問がなされる状況であり、主催者の工夫が生きていた。

【3月13日】

社会科学におけるデータ、社会的存在論、歴史学における物語に関する発表がなされた。以下にそれぞれの発表の概要を示す。

セッション：Data and Design

Philippe van Basshuysen (LSE),

“What is Economic Design and Why Should Philosophers of Science Care?”

本発表の主張を大まかに述べると、経済学における市場概念の変遷を「前進」として捉えるべきだというものである。経済学において、市場を設計可能なものと捉えるべきかに関しては、古くから論争があるが、近年、市場を設計可能なものと捉えるアプローチが有力になりつつある。このアプローチは誘因両立機構 (incentive compatible mechanism) の研究という形を取るもので、ゲーム理論や実験経済学の発展を背景としている。このような市場の捉え方の変化に対してはイデオロギーに駆動されたものに過ぎないという批判が存在する。この批判に抗して、ラカトシュの「前進的・後退的」プログラムの概念を参照し、市場概念の変遷は前進であるという見解を擁護する。

セッション：Social Ontology

Nadia Ruiz (Kansas), “Social Ontology and Model-Building: A Response to Epstein”

Brian Epstein による方法論的個人主義に対する批判を退けるのが本発表の目的である。Epstein によると、存在論的個人主義的は現実の社会現象と齟齬をきたすものであり、それゆえ、存在論的個人主義的を前提する方法論的個人主義には問題がある。このような Epstein 議論は存在論の議論が方法論の議論に帰結を持つということを前提しており、この前提には問題があるというのが本発表の主張である。この主張を擁護するため、社会科学におけるモデル構築は試行錯誤を通じて行われるものであり、モデル構築に先んじて存在論

を持ち込むことはかえってモデル構築にとって有害となりうるという主張を打ち出す。

Richard Lauer (St. Lawrence), “Naturalized Economic Ontology and the Interpretation of Infinite Idealizations in Econophysics”

自然化された経済学的存在論におけるアプローチの一つとして、一定の実体が理論の成功にとって不可欠であればその実体の存在を認めるアプローチが存在するが、本発表は、このアプローチに対して、Thomasson が提唱する **Easy Approach** を擁護する。その論拠として、後者のアプローチが経済物理学をうまく扱えることを示す。

Shaun Stanley (Bristol), “Cultural Evolutionary Theory and the Biology-Culture Analogy”

文化進化理論に対する批判の一つを退けることが本発表の目的である。文化進化理論とは、自然選択の理論によって人間社会の文化現象を説明しようとする理論である。この理論に対する批判の一つは、個体群と人間社会の間にはアナロジーが成り立たないというものがある。本発表は、このような批判は誤ったアナロジーを想定していると主張する。

セッション：Narratives

Mariana Imaz (Santa Cruz), “Principles of Narrative Reason”

歴史学の哲学においては、歴史家は単なる年表の作成に従事しているわけではなく、物語を語ることによって過去の事象を理解可能とし、説明しているといった主張が繰り返されてきたが、物語を語るということがいかなることなのかについては十分な分析がなされてこなかった。本発表は、物語を語るということを、ゲシュタルト心理学における「ゲシュタルト形成」になぞらえ、歴史学者が物語というゲシュタルトを形成するために用いる原理を4つ提案する。

Kotaro Namura (Kyoto), “Narrative Explanation as a Pragmatically Distinctive Kind of Explanation”

近年、歴史科学（過去を対象とした研究）の哲学において、過去を対象とした科学に固有の説明の様式として物語的説明が議論の俎上に上っている。本発表は、近年の議論における物語的説明の定式化は失敗していると論じた上で、物語的説明には過去を対象とした説明に特有の通時的構造があることを提案する。

基調講演：Robert Sugden (East Anglia)

帰納的推論はどのようにして可能なのかというヒューム以来の問題に対し、目立った (salient) 規則性の発見が帰納的推論を正当化するという主張を打ち出す。

【3月14日】

人種主義と社会構成主義、社会学における説明、社会科学におけるモデルに関する発表がなされた。以下にその概要を示す。

セッション：Crime

Kareem Khalifa (Middlebury College) and Richard Lauer (St. Lawrence University) “Do the Social Sciences Vindicate the Reality of Race?”

社会構築主義の台頭を背景として、「人種」に関する実在論が台頭している。この立場によれば、社会的な相互作用の一部を担うものとして人種は実在している。だが、本発表によると、この立場の議論には、成功している科学理論にとって必要なものは実在しているという前提があり、この前提には問題があるため、この立場を受け入れることはできない。

Aaron Fichtelberg (Delaware), “Is Structural Racism Explanatory? Lessons from Criminology”

社会現象の説明に関しては、方法論的個人主義と全体主義の対立が古くから存在する。構造的な人種主義に関する研究は全体主義の観点から行われており、その成果を参照して犯罪学に対する哲学的な検討を行う議論が存在する。だが、本発表によると、犯罪学は個人主義に基づいて行われており、哲学的な議論は、集団レベルで妥当な主張を個人レベルに適用する誤謬を侵している。

セッション：Social Explanation

Yafeng Shan (Kent), “Making Causal Claims in Sociology”

本発表の整理によると、因果関係を主張するための証拠は、相関、処置、メカニズムの三種類存在する。本発表は、社会学において因果関係を主張するための方法としては、相関とメカニズムに関する証拠を併用するのが最良の方法だと主張する。

Sahar Heydari Fard (Cincinnati), “How Not to be a Holist about Social Explanation!”

社会現象の説明に関しては、必ず個人を参照しなければならないとする方法論的個人主義と、その必要はないとする方法論的全体主義の対立が存在する。個人に注目してしまうと重要な情報が失われてしまうことがあるという観点から個人主義を退ける一方で、全体主義の立場の一つである機能主義にも問題があるとして、より優れた全体主義の立場を目指すことを提案する。

セッション：Methodological Challenges

Aydin Mohseni (Irvine), “Intervention and Backfire in the Replication Crisis”

心理学において、再現性問題が話題となっている昨今であるが、本発表は、社会認識論の観

点から、再現性の高い研究を高く評価するような介入を研究者共同体に対して行った場合には、かえって望ましくない結果が帰結する可能性を指摘する。

Donal Khosrowi (Leibniz-Hannover), “When Mechanisms Sleep”

エビデンス・ベースト・ポリシー・メイキング (EBPM) において、社会現象のメカニズムは重要な手がかりとなる。本発表は、社会現象のメカニズムに関して、作動している (*awake*) メカニズムと作動していない (*asleep*) メカニズムの区別を導入し、作動していないメカニズムの存在が政策決定にとって脅威となりえ、それゆえ作動していないメカニズムについて考慮することが重要になりうると主張した。

セッション：Normative Models

Mark Herman (Bowling Green), “Cognitive Heuristic Neither Was, Is, nor Should be a Natural Kind: Contrastive Kinds & the Legacy of Descriptive Rational Choice Theory”

本発表の主張によると、認知的ヒューリスティックは自然種とは言えない。

Lukas Beck (Cambridge) and Marcel Jahn (Humboldt-Berlin), “Normative Models and Their Success”

本発表は、社会科学におけるモデルについて、記述的モデル・規範的モデルという区別を導入し、規範的モデルについてはこれまで議論がなされてこなかったが、規範的モデルは記述的モデルとは異なる成功条件を持つと主張した。本発表の主張によると、規範的モデルとは、期待効用理論に代表されるように、行為の指導という目的を持ち、それゆえに現象の記述を目的とするモデルとは理想化の成功条件が異なる。

(作成：苗村弘太郎)